

7月以降の長雨と度重なる浸水・冠水により、農作物の生育に影響が出始めているため、被害を最小限にとどめるよう早急に適切な技術対策を講じ、県産農産物のブランド力の確保と品質の向上に努める。

1 水 稲

水稻は冠水期間が長引くほど減収率が高まるため、できるだけ早めの排水に努める。現在の生育ステージでは、冠水期間が1日程度であればほとんど影響が出ない場合が多い。しかしながら、水が引いても安心せず、周囲の安全に十分配慮しながら至急圃場を確認し、以下を参考に速やかに対応する。

(1) 冠水期間1日以内の場合

病害虫に注意

冠水期間が1日以内であれば、ほとんど減収しないが、病害虫の発生が懸念されるため、圃場を十分観察し、早期発見・早期防除を徹底する。

水管理に注意

排水後は新しい用水を入れ、その後飽水管理を行う。生育ステージが穂ばらみ期(出穂15日前頃)以降であれば、水を切らさないように管理する。

(2) 冠水期間2日以上の場合

水管理の徹底

冠水期間が数日間あった圃場のイネは、水分を消耗しやすい。また、排水したままにすると圃場が過剰に乾燥する場合がある。このため、排水後は新しい用水をいれ、水を切らさずに管理する。上記同様に出穂期前になったら湛水状態を維持する。

予防的防除の実施

稲体の体力低下により、病害虫に対する抵抗力が低下しやすくなるので、予防的に殺虫剤や殺菌剤の散布を行う。また、液剤で防除する場合は、葉に付着した泥を落とすように散布量を多めに実施する。

丁寧な圃場観察の実施

冠水期間が長くなると葉枯れや株枯れの症状を呈する場合がある。その他の異状にも十分注意し、確認したら指導機関に相談する。

参考(岩手県農研セ 2006)

葉枯れ程度が大きいほど異常穂や遅延穂の発生が高まり、収量が低下し、青未熟や青死、その他未熟が多く大幅に等級が低下する。(葉枯れ50%で異常穂50%以上)

(3) 圃場に泥や堆積物が多量にある場合

速やかに作溝を切る

浸水・冠水により泥が大量に流入した場合は、排水後に速やかに圃場の周縁部及び条間に、泥をかき分けるように作溝を掘り、新しい用水を入れる。

可能な限り水を保持

水路の損壊等で速やかな用水確保が困難な場合であっても、作溝や明渠を作ることで圃場内に均一に雨水がたまりやすくなることから、できるだけ多めに作溝を切り、水を切らさないよう管理する。

堆積層の窒素成分と施肥管理

堆積層の全窒素及び可給態窒素は高いことが多く、その後に稲体の窒素濃度が高まり、食味に影響を及ぼす可能性があるため、生育を回復させるための追肥は行わない。また、次年度の施肥は減らす必要があるので留意する。

(4) 圃場に流木や瓦礫、土砂がある場合や倒伏した場合

無理せず相談

圃場内に流木や瓦礫、土砂がある場合には、できる限り速やかに排出し、原状回復を行うことが望ましいが、状況によっては工事等が必要な場合があるので、無理な作業は行わず、関係機関に相談した上で対応する。

可能であれば株起し、簡易修復

浸水時の流れが早かった場合や土砂の勢いで倒伏した場合、可能であれば株起しを行うことにより、生育が回復する場合があるので実施する。

2 大豆

大豆は浸水・冠水に弱く、冠水数時間で減収率が高まる可能性が高くなるため、水稻より一層の早めの排水を行う。排水後も安心することなく、圃場を酸化的状態に保つための管理を徹底する。

(1) 排水後ほぼ健全な葉色である場合

速やかな中耕培土の実施

冠水期間が半日程度で、排水後に葉が黄化していない場合であれば、圃場の乾燥を待って、速やかに中耕培土を行う。その際、雑草が繁茂していれば、今後さらに繁茂する可能性があるため、畦間除草をあわせて行う。やや黄化しているようであれば、窒素成分で2~3kg/10aの速効性肥料を追肥した上で中耕培土を行い、生育を回復させる。

次に備えた排水対策の実施

浸水・冠水はいつ起こるか想定ができない。また、浸水・冠水で明渠や排水ラインが崩壊している場合があるため、もう一度排水対策を実施する。

(2) 排水後に葉色が黄化している場合

直ちに中耕培土を実施

排水後に葉が黄化してきた場合は、圃場を速やかに乾燥させ、直ちに中耕培土を行う。この場合、より雑草が繁茂し、生育を抑制する可能性があるため除草対策をあわせて実施する。その際、速効性肥料を窒素成分で4~6kg/10aを追肥する。

次に備えた排水対策の実施

浸水・冠水はいつ起こるか想定ができない。また、浸水・冠水で明渠や排水ラインが崩壊している場合があるため、もう一度排水対策を実施する。

(3) 圃場に泥等の堆積物がある場合

溝切りの実施

早期の泥の排出は、その後の浸水の備えにも繋がることから、泥の乾燥程度を見ながら溝切りを行い、畦間に酸素を供給し、根の活力を上げ、草勢の回復を図る。

乗用管理機による溝切り

泥が固まる程度になったら乗用管理機等で畦間を走行するなど、早めに根圏に酸素を供給する方法を講じる。

丁寧な圃場観察の実施

丁寧に圃場を観察し、通常と違う症状を確認したら速やかに指導機関に相談する。

3 果 樹

果樹は樹種によって根の耐水性に差があるとされ、かき、ぶどうは耐水性が強く、りんご、なしは中程度、もも、さくらんぼは弱い樹種に位置づけられている。

しかし、もも、さくらんぼであっても、浸水日数が1～2日程度であれば生育への影響は小さい場合が多く、3日以上になると影響が出始め、浸水期間が長いほど生育への影響が大きくなる。ただし、浸水期間が短くても、泥水に浸かった枝葉や果実は、褐変や落葉あるいは腐敗するケースが多く、また、樹勢や圃場の排水の良否により影響の大小は異なるため、今後の生育に注意しながら適切な対策を講じる。

【果樹の根の耐水性】（参考）

（弱い）もも、さくらんぼ < なし、りんご < かき、ぶどう（強い）

参考

- ・各果樹における根の耐水性の比較（小林、庵原、村井、林 1949）
- ・もも樹の浸水害の影響の確認と技術対策の確立（福島果試 H10～11）
- ・平成14年の浸水害の状況から（西村山普及課）

- （1）機械作業が可能な状態になったら、葉や枝に付着した泥は、出来るだけ水で洗い流す。
- （2）地表面を浅く中耕し、土壌の通気性、透水性の確保に努める。
- （3）葉の萎凋や葉色の低下が見られた場合は、着果量を減らすとともに、窒素成分を含む液肥の葉面散布等を行う。
- （4）倒伏した樹は出来るだけ早く起こし、根元に土を盛り支柱等で固定する。根の損傷が大きい場合は、着果数を減らし樹の負担を軽減する。
- （5）泥水に浸かった果実は、疫病等の果実腐敗が発生するケースが多いので、見つけ次第摘果する。
- （6）降雨によりりんご、なしの炭そ病、輪紋病、もものホモプシス腐敗症などの果実病害が多くなるため、防除間隔が空かないよう次回の防除を早めるか、追加散布を実施する。
- （7）今後も雨が多い予報が出ているので、圃場の排水対策を点検しておく。

4 野菜・花き

これまでの大雨、日照不足の影響により、同化養分不足による草勢低下、土壌表面に偏った根圏環境、病害の発生しやすい状況にある。梅雨の合間の晴れ間や、梅雨明け後の高温・強日射に備え、早期の草勢向上、根圏環境の改善、病害の徹底防除等に留意した栽培管理に努める。

（1）共通

冠水時間が長く、土砂の流入、作土の流出等で圃場が損壊した場合は、排水後、異物や被害作物等の片付けを行うとともに、土壌が乾燥した後に、排土や客土を行い、今後、作付け

する作物が安定して生産できるように努める。

浸水・冠水した圃場は、土壌水分が著しく多くなっているため、この状態が続き地温が上昇すると、根傷みを起こし草勢低下につながる。圃場を見回り、早急に排水溝・明渠の補修等を行い、排水を促す。また、マルチ栽培の場合は、マルチの裾を株元まで一時的に巻き上げる等して、土壌の乾燥促進、通気性向上に努める。

作業が可能な土壌水分になったら速やかに軽く畝間等を中耕し、土壌の通気性や透水性の確保に努める。

土壌の過湿、日照不足による草勢低下や今後の高温多湿により、根腐れ病、疫病、軟腐病等、病害の発生が多くなることが予想されるため、圃場の見回りを行い、病害虫の早期発見と適正防除に努める。

日照不足により草勢が低下していることから、薬害が発生しやすい状況にある。薬剤防除の際には薬害発生に十分注意し、気温の低い時間帯に散布する。

(2) 野菜

露地、施設共通

ア 日照不足で草勢が低下しているため、薬剤散布を行う場合は、草勢の回復や維持のために、尿素系の液肥を用いて40～80ppmの低い濃度で葉面散布を行う。

イ 排水が進み、過剰な水が無くなり、土壌状態が良くなったら、窒素主体の肥料を少量追肥する。

露地野菜

ア 露地野菜(にら、アスパラガス、えだまめ、きゅうり、なす等)では、茎葉の損傷などが発生した場合、細菌病等の発生源になり易いので、適切な防除と液肥の茎葉散布を行い、生育の回復を図る。

イ 葉や茎に泥が付着している場合は、光合成作用を阻害するため、防除の際、散布量をやや多くして、作物の洗浄を兼ねて実施する。

ウ えだまめ、ねぎでは、中耕、培土によって、土中の空気交換を促進して、新根の発育を促し、草勢の回復を図る。

エ ねぎは、土壌の過湿状態が続いたため、軟腐病が極めて発生しやすい条件にあることから、排水が進んだら、直ちに防除を行う。ねぎの培土作業は、軟腐病を回避するため、地温の低い早朝に行う。高温が続く場合は、無理な土寄せを行わず、涼しくなるまで作業を中止する。

施設野菜

施設内に浸水した場合、被害の程度により回復可能なものは、早急に圃場内の排水に努めるとともに、換気を徹底し、土壌が乾燥してから少量の追肥を行う。酸素供給剤を施用する場合は、排水が済んだら直ちに施用する。

(3) 花き

露地花き

ア きく、りんどう、ダリア等では、断続的な降雨と、日照不足により病害が発生しやすい状況となっている。きくでは褐斑病・黒斑病、りんどうでは葉枯病・褐斑病、花腐菌核病、ダリアでは灰色かび病等の発生が多くなることが懸念されるため、圃場の見回りを行い、早期発見に努め、適正防除を行う。

また、旧盆出しのきく、りんどう等では茎葉への汚れが目立たないように薬剤を選択す

るとともに、高温時の防除は薬害が出やすいので、涼しい時間帯に行う。

さらに、本年は、オオタバコガやヨトウムシ類の発生が平年よりやや多くなっていることから、早期発見に努め、発生密度が低い間に防除する。

イ 日照不足により草勢が低下しているため、病害虫防除の薬剤散布を行う場合は、草勢の回復や維持のために、尿素系の液肥を用いて窒素濃度 40～80ppm の低い濃度の葉面散布と併用する。

施設花き

トルコギキョウ、アルストロメリア、バラ等では、日照不足で推移していることから、茎葉がやや軟弱な傾向となっている。梅雨期の晴れ間や梅雨明け後は、日射が強くなり、萎れや、葉焼け等が発生しやすくなるので、天候に応じたきめ細かな灌水管理を行うとともに、高温対策として施設の換気の徹底と適切な遮光管理に努める。

5 飼料作物

- (1) 浸水・冠水した牧草は、排水後できるだけ早く刈り取り、反転乾燥し土砂を落とす。また、浸水草地は雑草が侵入しやすいため、刈取り高さを 10 cm 以上とし、収穫後速やかに追肥して草勢の回復を図る。
- (2) 倒伏程度が著しい飼料用とうもろこしは、速やかに刈り取りサイレージ調製する。その際は高い位置で刈り取り、土の混入をできるだけ防ぐ。今の時期は水分が高いため、予乾等により水分調整する。また、サイレージの品質向上を図るため、乳酸菌等の添加により発酵を促す。倒伏程度の軽いものは回復を待って適期に収穫する。

6 病害虫対策

浸水・冠水により、農作物全般で根痛みや茎葉の傷が発生するとともに、植物体の草勢・樹勢低下により、病害に対する抵抗性が弱くなっている。

また、梅雨前線の活発な活動により、ヨトウムシ類など一部の飛来性害虫の発生がやや多くなっており、引き続き、害虫の発生動向にも注意が必要である。

- (1) ほ場を丁寧に見回って病害虫の発生をよく観察し、早期発見・早期防除に努める。
- (2) 病害には、感染後 3～5 日程度の短期間に発生するものがある一方で、7～14 日後に発生が見えてくるものもあるため、ほ場の見回り・観察は継続して実施する。また、殺菌剤は発生拡大前の予防防除に努める。
- (3) 飛来性害虫（オオタバコガ等）は短期間に急増することが多いため、発生をみたら直ちに薬剤防除を実施する。
- (4) 殺菌剤・殺虫剤ともに降雨により残効期間が短くなるため、降雨が続く場合には散布間隔を短くしたり、雨の合間をみての防除に努める。
- (5) 薬剤防除する場合、降雨後の多照高温により薬害が発生しやすくなるため、朝や夕方の涼しい時間帯に防除を実施する。

水路の増水や土砂崩れ等に十分注意し、安全を確認しながら作業を進めましょう！

防除作業で死亡事故が発生しています。降雨で作業が遅れていても、焦らずに落ち着いて、防除作業等を行いましょう！

農薬を使用する場合には、農薬ラベルをよく確認し、適用作物、収穫前使用日数、使用回数、に使用量（濃度）の使用基準や注意事項を遵守して防除してください。